

叙景、叙事、叙情の歌—オペラの受容と日本語音楽劇の近代

大西 由紀(東京大学)

本研究は、日本において明治 30 年代(1897～1906 年)後半から始まる、日本語によるオペラ上演の試みを通時的に検討したものである。今回の発表ではまず博士論文全体の概要を示したのち、特に^{さっさこうか}佐々紅華(1886～1961 年)によって制作された SP レコードのうち、「お伽歌劇」を標榜する児童向け作品を取り上げた箇所について、詳細な報告を行う。

オペラを含む西洋演劇の台本は一般的に、登場人物の会話のやりとりのみによって物語が展開するのに対し、日本の伝統音楽劇では、三人称視点からの語りが入り込まれたり、登場人物の心の声を物語空間の外にいる歌唱者が代弁したりする。この伝統の影響であろうか、オペラを目指して書かれた日本語創作音楽劇の初期のものには、情景や登場人物の行動を三人称視点から説明した詞章が含まれるものが少なくない。また、この時期の作品では、登場人物同士の会話のやりとりが歌唱のみで表現された例は少なく、多くの場合、一方がセリフで問いかけると他方が歌で答える、といった形でやりとりが進められる。

舞台での上演を前提としない SP レコードのお伽歌劇においても、その萌芽期の作品は、やはり日本の伝統音楽劇の影響を残している。佐々が手がけたお伽歌劇のごく初期のものである『ウントコ爺さん』(東京レコード 375～376、1915 年 7 月か)は、三人称視点からの語りを含み、歌唱で表現される発話のごく一部に限られる。ところが佐々が浅草オペラで舞台経験を積んだのちに作詞作曲した『茶目子の日』(ニッポノホン 3657～3658、1919 年 10 月)になると、三人称視点からの語りはなくなる。また、一連の対話のやりとりすべてが歌唱で表現された箇所もある。本発表では、お伽歌劇レコードの台本形式が、西洋のオペレッタに近い形へと、短期間のうちに急速に整理されていったさまを確認する。